View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nagasaki International University Academic Institutional Repository

長崎国際大学教育基盤センター紀要　第２巻　2019年３月　55頁～65頁

原著論文

地域スポーツ教室における指導者意識が参加者の満足度に与える影響

元　嶋　菜美香，宮　本　　彩，田　井　健太郎
熊　谷　賢　哉，宮　良　俊　行
（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科）

Psychological Effects of Leader's Consciousness on Participants' Satisfaction in the Community Sports Classes

Namika MOTOSHIMA, Aya MIYAMOTO, Kentaro TAI,
Kenya KUMAGAI and Toshiyuki MIYARA
(Department of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

The purpose of this study was to examine the influence of the leader's consciousness on the satisfaction of the students and parents participated in the community sports classes conducted at Nagasaki International University for the purpose of providing sports environment for children and providing active learning for university students learning sports. We asked students who participated in community sports classes to answer the formative evaluation scale and evaluation of satisfaction, and we asked university students who were teaching community sports classes to answer the physical education class observation check list after the class.

As a result of having calculated coefficient of correlation of the class evaluation of satisfaction of the students who participated in the community sports classes and the subitem of the physical education class observation check list of the university student, "be concerned with a child heartily" and "devise for children teaching each other positively" showed significance correlation with "outcome" and "cooperation". As for a university student being concerned with a student heartily, the possibility that it disturbed to get the learning outcome of the students was suggested while it led to the pleasure of the students, and it became clear that the contents and teaching technique of the university student were important.

Key words

Community Sports, Satisfaction, Formative Evaluation, Physical Education class Observation Checklist

要　旨

本研究の目的は、子ども達へのスポーツ環境の提供およびスポーツを学ぶ大学生へのアクティブラーニングの場の提供を目的として長崎国際大学で実施された地域スポーツ教室の指導者意識が、参加者である児童生徒および保護者の満足度に与える影響を明らかにすることである。地域スポーツ教室に参加した児童生徒に対して形成的授業評価票および地域スポーツ教室の満足度、地域スポーツ教室の指導にあたった学生に対して体育授業観察チェックリストへの回答を地域スポーツ教室実施後に求めた。

児童生徒の形成的授業評価と大学生の体育授業観察チェックリストの下位項目の相関係数を算出した結果、「心を込めて児童に関わること」と「成果」（$r=-.47, p<.05$）および「意欲・関心」（$r=.45, p<.05$）、「子ども同士が積極的に教え合うよう工夫すること」と「協力」（$r=.56, p<.001$）の間に有意な相関が見られ、学生が児童生

徒に心を込めて関わることは児童生徒の楽しさにつながる一方で、児童生徒の学習成果を得る時間を妨げてしまう可能性が示唆され、指導にあたった大学生の関わり方や指導方法の工夫が重要であることが明らかとなった。

キーワード
地域スポーツ、満足度、形成的授業評価、体育授業観察チェックリスト

1．緒　　言

⑴　スポーツを通した大学の地域貢献

「一億総スポーツ社会」の実現に取り組むことを目的として、第二期スポーツ基本計画が策定された（スポーツ庁［2017］）。スポーツ基本計画は、スポーツを取り巻く現代的課題を踏まえ、スポーツに関する基本理念を示すスポーツ基本法の制定とともに、スポーツの推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、推進に関する基本的な計画を定めたものである（文部科学省［2012］）。この計画の中で今後5年間に総合的かつ計画的に取り組む施策として、「スポーツを「する」「みる」「ささえる」スポーツ参画人口の拡大と、そのための人材育成・場の充実」が挙げられ、スポーツ環境の充実が求められている。スポーツ環境とは、スポーツに不可欠な時間、空間、仲間や指導者などによって構成され、特に子どもたちは塾や室内遊びの増加による外遊びやスポーツ活動時間の減少、空き地や公園などの遊び場の減少、少子化やスポーツクラブの減少に伴うスポーツをする仲間の減少により、スポーツを実施する機会そのものが減少している。

これまでスポーツ環境の担い手であったスポーツ少年団や学校部活動では、少子化に伴う休廃部の増加や指導者不足（山口［2006］）などの問題が浮き彫りになっている。子どもたちのスポーツ環境を支える新たな取り組みとして、子どもから高齢者まで（多世代）、様々なスポーツを愛好する人々が（多種目）、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）という特徴を持ち、身近な地域でスポーツに親しむことのできる総合型地域スポーツクラブに注目が集まっている（文部科学省［2001］）。それぞれの志向に応じて子どもが継続してスポーツができる環境が確保でき、一校でチームを編成することができない、やりたい種目がないといったジュニア期における問題を解決するために、スポーツ少年団や運動部活動に総合型地域スポーツクラブを加えた新たな地域スポーツ体制も提言されている（公益財団法人日本スポーツ協会［2018］）。

スポーツ基本計画では、スポーツ環境の整備のために大学の有するスポーツ資源（学生、指導者、研究者、施設等）の活用についても言及されている。特に体育・スポーツ系の学部学科を有する大学にはスポーツ施設が充実しており、多様なスポーツ種目の競技者や指導者に加え、指導やスポーツボランティアに関心を示す学生が多く在籍していることから、大学が有するスポーツ資源への期待が高まっている。また、スポーツ環境をめぐる諸問題への対策として大学の所有するスポーツ資源を活用し、子どもをはじめとした地域住民がスポーツに参加する機会を設け、スポーツを通じて地域コミュニティを活性化させることを目的とした「大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化促進事業」（文部科学省［2013］）が推進されるなど、社会的ニーズも高まっている。

これらの期待に応えるように、多くの大学ではスポーツ資源を活用し、スポーツを通じた地域貢献を果たすことやスポーツによる地域貢献に携わる人材育成を目指して、スポーツを通した地域連携に取り組む大学が増えている（長谷川［2010］：スポーツ庁［2018］）。大学を拠点とした総合型スポーツクラブも数多く報告されており（池田［2010］）、様々な形で大学や大学生が関与している。

⑵　大学生のアクティブラーニングの場としての地域スポーツ

地域貢献としてだけでなく、大学生の教育の一環としてスポーツ教室を運営し、学生の指導力・実践力の向上を目的としてスポーツボランティア学生を組織的に活用し、活動を単位認定している大学もみ

られる（全国大学体育連合［2012］）。地域スポーツは「放課後や休日に学校活動とは別に地域の子ども達を集めて運営されるスポーツ団体」と定義され（永井［2013］）、総合型地域スポーツ、年間を通して行われるボランティア主体の地域スポーツ、習い事としての民間経営の地域スポーツに分類される（藤後他［2018］）。大学で学んだ知識を実践的に活かし、総合型地域スポーツクラブやボランティア主体の地域スポーツにおける指導・運営やスポーツボランティア活動は「アクティブラーニング」の一つであると位置づけることができる。

アクティブラーニングとは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」であり、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ることを目的とし、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等の活動が挙げられる（中央教育審議会［2012］）。大学では、主体的な学修の体験を重ねて生涯学び続ける力を修得するために、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が求められており、特にスポーツを専攻している大学では問題解決学習や体験学習としてスポーツ教室における指導・運営を行うことがある。

スポーツを通したアクティブラーニング[1]の形態は様々であり、TOKYO 2020大会へのボランティア参加を通じた大学生の学びを支援する「TOKYO2020大会ボランティア COCOROE プロジェクト」（四天王寺大学［2018］）、学生の体育・スポーツ指導力育成プログラムとして小学生を対象としたスポーツ教室への学生スタッフ派遣（小山［2016］）、有志の学生によるスポーツボランティア活動を「プロジェクト演習」として確立し、地域ニーズにこたえスポーツ指導活動やイベント企画・運営を行うなどが挙げられる（炭谷［2016］）。また、地域コミュニティの再生や地域資源の発掘などを図る地域と大学の協働プロジェクトである「「域学連携」地域活力創出モデル実証事業」では、地域のスポーツ行事に学生ボランティアが参加するなど、地域は大学の有する知識や人材を活用でき、大学は大学生に実践的に学ぶ場を提供できるといった双方向のメリットがある（総務省［2013］）。このように、地域のニーズに応えた地域貢献を行いながら、大学で学んだ知識や理論をスポーツを通して実践することができ、スポーツという場を通して学生教育と地域貢献を両立することができる。

⑶　地域スポーツの測定・評価

大学が地域貢献および大学生のアクティブラーニングの場として実施する活動に関してこれまで多数の報告が出されており、スポーツボランティア学生へのアンケート調査や効果測定等を行っている（豊田・金森［2006］：常浦他［2016］）。しかし、地域スポーツに参加した大学生が地域スポーツの指導・運営を通して何を学んだかという教育効果や指導意識についてほとんど検討されていない。TOKYO2020への大学生ボランティア派遣に関して「単位目当てではないか」（朝日新聞 DIGITAL［2017］）といった物議が巻き起こった背景には、スポーツボランティア活動を通じて大学生が何を学ぶのか、大学生が参加することによってどのような効果があるかについて知見が示されていないためであると考えられ、これらを明らかにすることは喫緊の課題であるといえる。

また、地域スポーツ教室に参加・帯同した保護者を対象とした先行研究では、児童生徒と指導者との交流が保護者の地域スポーツ教室後の気分状態や継続意志に正の影響を与えることが明らかとなっている（元嶋他［2018］）。しかし、総合型地域スポーツクラブはこれまで創設・育成に重点が置かれており、PDCA サイクルの観点から評価を行って点検・評価の結果を踏まえて改善を図っているクラブが少ないこと（スポーツ庁［2016］）、地域スポーツ教室における児童生徒を対象とした妥当性が確認された簡便な調査尺度はみられない（元嶋他［2018］）などの理由から、地域スポーツ教室に参加した児童生徒や保護者に対して大学生の関わり方やプログラムの評価を求めた研究はみられず、どのような大学生の指導意識・行動が参加者の満足度につながるかは明ら

かにされていない。

一方で、同じく児童生徒を対象とした教科教育法領域では、形成的授業評価票（長谷川他［1995］）を使用した児童生徒による体育授業評価の手法が確立している。形成的授業評価は、体育授業を受けた子ども自身が授業のよしあしを評価する４因子９項目からなる標準化された評価尺度であり、信頼性・妥当性が確認されている（長谷川他［1995］）。また、「よい体育授業の条件」や「体育授業の構造」を明らかにし、体育授業の観察者が体育授業のよしあしを評価する５因子15項目からなる体育授業観察チェックリスト（高橋他［1996］）が作成され、経験豊かな観察者の評価は児童の形成的授業評価と高い相関を示す有効なツールであることが明らかとなっている（日野他［1996］）。さらに、小学校低学年の体育授業を担当する教員の指導意識を明らかにするために体育授業観察チェックリストの項目を使用し、小学校教員の体育授業における改善点を挙げている（鬼澤他［2017］）。加えて、公認スポーツ指導者の指導者行動に関して、練習の場における学習効果を高めるために四大教師行動をもとにした指導者行動のマネジメントについて言及されるなど（財団法人日本体育協会［2005］）、体育授業以外のスポーツ指導の場であっても教科教育的観点から分析することで指導者行動の改善につながると考えられる。

地域スポーツ教室の実施目的は多様であるが、子どものスポーツ実施率の向上のため、多様な子どもが多様なスポーツに親しむために開設しているにも関わらず、保護者の評価を測定するにとどまり子どもの評価を確認しないことは、参加した子どもをスポーツ嫌いにしてしまう可能性もある。加えて、大学生のアクティブラーニングの場として地域スポーツ教室が実施されている場合、参加した学生が自ら活動や指導意識を振り返り、フィードバックを行う必要がある。すでに実用性が示されているだけでなく指導行動との関係性も示されている形成的授業評価票および体育授業観察チェックリストが地域スポーツ教室においても援用可能であれば、児童生徒の満足度に係る要因を明らかにするとともに、満足度を高めるための大学生の指導意識の改善につながると考えられる。

２．目　　的

本研究の目的は、子ども達へのスポーツ環境の提供およびスポーツを学ぶ大学生へのアクティブラーニングの場の提供を目的として長崎国際大学で実施された地域スポーツ教室の指導者意識が、参加者である児童生徒および保護者の満足度に与える影響を明らかにすることである。

指導意識が満足度に与える影響を明らかにするために、児童生徒の形成的授業評価と満足度の相関係数、大学生の体育授業観察チェックリストと児童生徒および保護者の満足度の相関係数、学生の体育授業観察チェックリストと児童生徒の形成的授業評価の相関係数を算出した。

３．方　　法

⑴　対象者

１日２時間の地域スポーツ教室（計20回実施）に参加した児童生徒を調査対象とし、延べ511サンプルを回収した。また、参加・帯同した保護者を調査対象とし、延べ325サンプルを回収した。さらに、地域スポーツ教室の指導を担当した大学生を調査対象とし、延べ201サンプルを回収した。対象者のうち複数回参加者は、児童生徒56名、保護者42名、大学生46名、単数回答者は児童生徒37名、保護者31名、大学生71名であった。

⑵　実施期間および実施内容

地域スポーツ教室は、土曜日の19時から21時までの１回２時間、体育館やテニスコートなどの大学施設を使用して行った。実施期間は2017年６月３日から12月16日、計20回実施した。実施したスポーツ種目（実施回数）は、バレーボール（２回）、バスケットボール（２回）、フットサル（３回）、ラケットスポーツ（４回）、親子体操（２回）、アーチェリー（２回）、空手道（２回）、剣道（２回）、親子運動会（１回）であり、各教室の参加者および指導者は毎回異なっていた。

実施したスポーツ教室のプログラムおよび参加・帯同した児童生徒数および保護者数、指導を担当した大学生数は表１の通りである。各プログラムは、大学教員（バレーボール、バスケットボール、空手

表１　参加・帯同した児童生徒数および保護者数、指導を担当した大学生数

	種　目	児童生徒	保護者	指導大学生
1	バレーボール	11	8	8
2	親子体換	18	14	5
3	アーチェリー	16	10	20
4	空手道	18	11	10
5	剣道	21	16	6
6	ラケットスポーツ	32	20	11
7	ラケットスポーツ	30	18	15
8	フットサル	24	16	5
9	アーチェリー	33	24	19
10	バレーボール	30	16	11
11	空手道	25	18	6
12	フットサル	31	17	6
13	ラケットスポーツ	33	24	15
14	ラケットスポーツ	35	22	18
15	フットサル	32	18	5
16	剣道	19	16	8
17	バスケットボール	32	17	7
18	親子体操	26	15	5
19	親子運動会	22	13	14
20	バスケットボール	23	12	7
	合　計	511	325	201

道、剣道）や外部指導者（フットサル、親子体操）がプログラムを作成し、大学生が指導補助を担当したもの、学生が主体となってプログラムを作成し、学生自身が指導を担当したもの（ラケットスポーツ、アーチェリー、親子運動会）があり、教員および外部指導者、大学生は本研究の測定項目を踏まえずにプログラムを作成した。また、指導を担当した大学生の属性は、保健体育科教員養成課程やスポーツ指導者養成課程所属学生や運動部活動所属学生など様々であり、参加動機は、所属する部活動顧問の要請、教職課程の授業の一環、自主的参加など多様であった。

⑶　手続き

毎回の地域スポーツ教室に参加した児童生徒に対して、フェイスシート（名前、性別、年齢）と形成的授業評価票および地域スポーツ教室の満足度に関する調査項目への回答を地域スポーツ教室実施前後に求めた。

毎回の地域スポーツ教室に参加・帯同した保護者に対して、フェイスシート（名前、性別）と地域スポーツ教室の満足度に関する調査項目への回答を地域スポーツ教室実施前後に求めた。

地域スポーツ教室の指導にあたった大学生に対して、フェイスシート（名前、性別、教職志望の有無、専門種目・所属部活動）および体育授業観察チェックリストへの回答を地域スポーツ教室実施後に求めた。

⑷　測定項目

参加した児童生徒に対して、地域スポーツ教室参加後にプログラムの内容について、形成的授業評価票の「意欲・関心」、「成果」、「学び方」、「協力」４因子９項目のうち、地域スポーツ教室の評価に妥当であると考えられる「楽しさの体験」、「技能の伸び」、「自主的学習」、「なかよく学習」の４項目を援用し、「１：かなりたのしかった～５：まったくたのしくなかった」、「１：かなりできるようになった～５：まったくできるようにならなかった」、「１：かなり運動できた～５：まったく運動できなかった」、「１：かなりなかよくできた～５：まったくなかよくできなかった」の５件法で回答を求めた（表２）。また、「地域スポーツ教室の満足度」について、「１：満足した～５：満足できなかった」の５件法で回答を求めた。

参加・帯同した保護者に対して、「地域スポーツ教室の満足度」について、「１：満足した～５：満足できなかった」の５件法で回答を求めた。

指導を担当した大学生に対して、地域スポーツ教室実施後に、体育授業観察チェックリストの「教師の相互作用」、「学習環境」、「意欲的学習」、「授業の勢い」、「効果的学習」の５因子15項目のうち、対象者への負担を鑑み因子負荷量の高い各因子上位２項目計10項目を援用し、「１：常に心がけた～５：全く心がけなかった」の５件法で回答を求めた。体育授業観察チェックリストは、他者の体育授業を観察し評価する調査尺度であるが、本研究では大学生が地域スポーツ教室に関わる自身の取り組みについて自己評価を行い回答するよう求めた。また、「学習環境」因子および「授業の勢い」因子の下位項目である「学習資料（学習ノート、カード）の有効活用」や「移動や待機の場面」などの体育授業に関連する

表２　形成的授業評価を援用した調査項目

因　子	下位項目	質問内容
意欲・関心	楽しさの体験	今日のスポーツ教室はたのしかったですか？
成果	技能の伸び	いままでできなかった運動や作戦ができるようになりましたか？
学び方	自主的学習	今日のスポーツ教室では、自分からすすんで運動できましたか？
協力	なかよく学習	ともだちとなかよくできましたか？

表３　体育授業観察チェックリストを援用した調査項目

因　子	質問内容
教師の相互作用	ほめたり、励ましたりする活動を積極的に行うこと
	心を込めて子どもたちに関わること
学習環境	スポーツ教室に参加した効果を生み出すようなスポーツ（教材、場づくり、課題）を用意すること
	楽しく取り組めるようなスポーツ（教材、場づくり、課題）を用意すること
意欲的学習	子どもが意欲的にスポーツに取り組むよう工夫すること
	子どもの笑顔や拍手、歓声がみられるよう工夫すること
授業の勢い	スポーツ教室の展開をスムーズに行うこと
	スポーツ教室の約束ごとを守らせること
効果的学習	子ども同士が、積極的に教え合うよう工夫すること
	子どもが上達するよう工夫すること

項目を除き、その他体育授業を示す「授業」や「学習」を「スポーツ教室」や「参加した効果」などに修正した（表３）。加えて、「地域スポーツ教室の満足度」について、「１：満足した～５：満足できなかった」の５件法で回答を求めた。

⑸　倫理的配慮

本研究を行うにあたり、長崎国際大学人間社会学部国際観光学科研究倫理委員会の承認を得た。

児童生徒に対する倫理的配慮として、児童生徒本人および保護者に対して調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を書面および口頭にて説明し、同意書への署名をもって本研究への参加承諾を得た。調査当日に保護者が同伴していない、保護者の同意が得られなかったデータ17サンプルは、分析の対象から除いた。

保護者に対する倫理的配慮として、保護者もしくはその家族に対して調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を書面および口頭にて説明し、同意書への署名をもって本研究への参加承諾を得た。保護者本人もしくはその家族の同意が得られなかったデータ10サンプルは、分析の対象から除いた。

大学生に対する倫理的配慮として、学生本人に対して調査実施後に調査内容およびデータの使用方法等を書面および口頭にて説明し、同意書への署名をもって本研究への参加承諾を得た。

⑹　分析方法

参加した児童生徒から得られた511サンプルのうち、欠損値のなかった330サンプルを分析対象とした。満足度得点を独立変数、形成的授業評価票の４項目の得点を従属変数とし、強制投入法による重回帰分析を行った。また、毎回のスポーツ教室の満足度得点の平均値を算出した。

参加・帯同した保護者から得られた325サンプルのうち、欠損値のなかった307サンプルを分析対象とした。毎回のスポーツ教室の保護者の満足度得点の平均値を算出した。

また、指導にあたった大学生から得られた201サンプルのうち、欠損値のなかった197サンプルを分析対象とした。先行研究（日野他［1996］）を参照し、毎回のスポーツ教室の児童生徒および保護者の満足度得点の平均値と大学生の体育授業観察チェックリスト得点の平均値の相関係数を算出した。

統計分析には統計ソフト SPSSVer.25 を使用し、有意水準は危険率５％未満とした。

4．結果および考察

⑴　児童生徒の形成的授業評価と満足度の関係

満足度得点を独立変数、形成的授業評価票の４項目の得点を従属変数とした重回帰分析の結果、説明率は47％で、説明率の検定は0.1％水準で有意であった（表４）。標準偏回帰係数の有意性を見ると、「意欲・関心」（$\beta=.58, p<.001$）および「学び方」（$\beta=.14, p<.01$）において有意な係数を示した。

先行研究（長谷川他［1995］）においても「授業に対する総合的評価」（今日の授業は、とてもよかったと思いますか）との相関係数は「意欲・関心」が最も高かったことを踏まえると、地域スポーツ教室の満足度には体育授業と同様に子どもたちが楽しさを感じられたかどうかが大きな影響を与えることが示された。一方で、「学び方」に関しては先行研究と異なり、地域スポーツ教室の満足度と高い相関を示した。これは、半ば強制的に参加させられている体育授業と異なり、児童生徒が自ら選択して地域スポーツ教室に参加しているためであると推測される。

また、説明率は47％と有意な値を示したことから、形成的授業評価票を使用することで地域スポーツ教室の児童生徒の満足度に影響を与える要因が一部測定可能であることが示された。

表４　児童生徒の形成的授業評価と満足度の重回帰分析結果

説明変数因子	下位項目	$N=330$	
		Mean	β
意欲・関心	楽しさの体験	1.16	.58***
成果	技能の伸び	1.50	.02
学び方	自主的学習	1.45	.14**
協力	なかよく学習	1.45	.05
R_2		0.47	***

従属変数：満足度　***：$p<.001$　**：$p<.01$

⑵　児童生徒の満足度と大学生の体育授業観察チェックリストの関係

児童生徒の満足度得点の平均値と大学生の体育授業観察チェックリスト得点の下位項目の平均値の相関係数を算出した結果（表５）、参加した児童生徒の満足度と「スポーツ教室の約束事を守らせること」との間に負の相関がみられた（$r=-.38, p<.10$）。地域スポーツ教室に参加した児童生徒は指導にあたった大学生が約束ごとを守らせるように意識をして指導を行ったことで、満足度が低下することが示された。スポーツの楽しさの一つとして、解放性（爽快感）や遊戯性などが挙げられ（和田［2008］）、地域スポーツ教室に参加した児童生徒は、学校と異なり制約の少ない環境で自由に運動を行うことを求めて参加したと考えられる。そのような動機付けを持って参加したにもかかわらず、大学生がルールを強調すること、規則を守らせることを意識して指導を行ったことで自由が制限され、スポーツ教室への満足度が低下したと考えられる。

表５　児童生徒の満足度と大学生の体育授業観察チェックリストの下位項目の相関係数

因　子	下位項目	*Mean*	*SD*	*r*
相互作用	1	1.38	0.19	0.10
	2	1.39	0.19	0.13
学習環境	3	1.88	0.33	0.19
	4	1.64	0.31	0.33
意欲的学習	5	1.57	0.29	0.17
	6	1.43	0.24	−0.26
勢い	7	1.75	0.32	0.12
	8	1.66	0.30	−0.38†
効果的学習	9	2.17	0.46	0.06
	10	1.63	0.30	0.03
満足度		1.29	0.17	—

†：$p<.10$

⑶　保護者の満足度と大学生の体育授業観察チェックリストの関係

参加・帯同した保護者の満足度得点と大学生の体育授業観察チェックリストの下位項目の平均値の相関係数を算出した結果（表６）、保護者の満足度に最も強い相関を示したのは「子どもの笑顔や拍手、歓声がみられるよう工夫すること」であった（$r=.56, p<.05$）。また、「子どもが意欲的にスポーツに取り組むよう工夫すること」（$r=.42, p<.10$）や「子どもが上達するよう工夫すること」（$r=.40, p<.10$）との間にも相関がみられた。地域スポーツ教室に参加・帯同した保護者は、笑顔で児童生徒が意欲的にスポーツに取り組み、スポーツが上達するように大学生が意識することで満足度が高まることが示され

た。また、部活動やスポーツクラブなどと同様に、地域スポーツにおいても保護者は指導者の指導力や適切な対応を求めていることから（國本他［2012］）、指導者が大学生であっても同様に技能の向上や子どもたちの動機づけを高めるような指導によって地域スポーツ教室の満足度が高まる可能性が示された。

さらに、地域スポーツ教室に期待する要因として、児童生徒が「勝ちたい・活躍したい・注目されたい」といったスポーツの価値意識を期待する一方で、保護者は「何事にも挑戦する気持ち・精神的な育成」といった生活態度の指導などを求めることが明らかとなっている（谷口他［2007］）。本研究においても、児童生徒では満足度に否定的に影響した「スポーツの約束事を守らせること」は保護者には肯定的に受け入れられていることが明らかとなり、地域スポーツ教室の満足度に影響する要因は児童生徒と保護者とで異なることが示された。

表 6　保護者の満足度と大学生の体育授業観察チェックリストの下位項目の相関係数

	下位項目	*Mean*	*SD*	*r*
相互作用	1	1.38	0.19	0.30
	2	1.39	0.19	0.20
学習環境	3	1.88	0.33	0.30
	4	1.64	0.31	0.35
意欲的学習	5	1.57	0.29	0.42†
	6	1.43	0.24	0.56*
勢い	7	1.75	0.32	−0.08
	8	1.66	0.30	0.18
効果的学習	9	2.17	0.46	0.19
	10	1.63	0.30	0.40†
保護者満足度		1.25	0.15	—

*：$p<.05$　†：$p<.10$

⑷　児童生徒の形成的授業評価と大学生の体育授業観察チェックリストの関係

児童生徒の形成的授業評価と大学生の体育授業観察チェックリスト得点の下位項目の相関係数を算出した結果（表７）、「心を込めて児童に関わること」と「成果」（$r=-.47, p<.05$）および「意欲・関心」（$r=.45, p<.05$）、「楽しく運動できるような運動（教材・場づくり・学習課題）を用意すること」と「意欲・関心」（$r=.43, p<.10$）、「スポーツ教室の約束ごとを守らせること」と「学び方」（$r=-.43, p<.10$）、「子ども同士が積極的に教え合うよう工夫すること」と「協力」（$r=.56, p<.01$）の間に相関が見られた。

体育授業において、単元はじめではマネジメントの方法や学習方法（学び方）について指導する必要があり、マネジメント場面が多くなることが指摘されている（高橋他［2003］）。対象とした地域スポーツ教室では毎回実施するスポーツ種目が異なり、参加者だけでなく指導にあたる大学生も種目によって異なることから、約束ごとやルールの説明に多くの時間がさかれる。体育授業において学習成果に直接つながらないマネジメント行動は子どもの形成的授業評価に肯定的に作用しないことから（髙橋［2000］）、「スポーツ教室の約束ごとを守らせること」を大学生が意識することが、児童生徒が「自ら進んで運動すること」を妨げていることが示された。

また、大学生が「心を込めて子どもたちに関わること」は、児童生徒が「今日のスポーツ教室は楽しかった」と感じることにつながるが、「いままでできなかった運動や作戦ができるようになる」ことにつながらないことが示された。先行研究においても、教師行動と子どもの形成的授業評価との関係から、学習成果に強く関係するのは相互作用行動であり、特に子どもの運動学習に対する賞賛、助言、励ましは授業の雰囲気をよくし、学習成果に肯定的に作用する一方で、説明や情報提示は技能の伸びに否定的に影響することが示されている（高橋他［1989］）。また、熟練教師と教育実習生のコミュニケーションを比較した研究では、授業者としての経験の乏しい教育実習生の声かけは一方的な指導やアドバイス、具体的な例示が多い一方で、熟練教師は説明を促すかかわりや課題意識を引き出す声かけが多く、生徒たちの主体的な授業参加姿勢を引き出すための声かけ・かかわり方をしていることが示されている（中島［2017］）。本研究においても、大学生が心を込めてほめたり励ましたりすることが児童生徒の楽しさにつながる一方で、指導経験が乏しいことから熱心に指導や説明を行ったことが反って児童生徒が学習成果を得る時間を妨げてしまったと推測され、地域スポーツ教室においても単に大学生が心を込めて接するだけでなく、運動技能の向上につながるような

表７　児童生徒の形成的授業評価と大学生の体育授業観察チェックリスト得点の下位項目の相関係数

因　子	下位項目	関心・意欲	成　果	学び方	協　力
相互作用	1	0.23	−0.01	−0.33	0.07
	2	0.45*	−0.47*	−0.17	0.33
学習環境	3	0.35	0.01	−0.31	−0.02
	4	0.43†	0.02	0.07	−0.07
意欲的学習	5	0.24	0.00	−0.36	0.12
	6	0.09	−0.24	−0.05	0.10
勢い	7	0.17	−0.13	−0.31	0.13
	8	−0.16	−0.08	−0.43†	−0.06
効果的学習	9	0.23	−0.03	0.08	0.56**
	10	0.12	0.24	−0.31	0.11

**：$p<.01$　*：$p<.05$　†：$p<.10$

関わり方や指導方法の工夫が重要であることが示された。

対して、大学生が「楽しく取り組めるようなスポーツを用意すること」や「子ども同士が積極的に教え合うよう工夫すること」を意識することで、児童生徒が「今日のスポーツ教室は楽しかった」と感じ、「友達と仲良くすること」につながり、大学生が事前に準備したことや指導を行う際に留意したことが児童生徒の意欲や活動に肯定的に影響することを示した。対象とした地域スポーツ教室では、主にスポーツ指導者や体育教師を目指す部活動や教職課程に所属している大学生が中心となってプログラムを作成し、事前準備を行っている。多くの時間をプログラム作りにかけることや事前にシミュレーションを行い用具を準備すること、児童生徒が積極的に交流するよう活動内容や指導方法を工夫することによって、子どもたちが楽しく積極的に交流することにつながることが示された。

５．本研究の課題と今後の展望

⑴　調査に使用した尺度

本研究の課題として、対象者の負担を軽減する目的から従来の形成的授業評価票および体育授業観察チェックリストを一部削除して援用していることが挙げられる。この結果、先行研究との厳密な比較を行うことができない。一方で、本研究の結果より、地域スポーツ教室の評価測定に両尺度が使用できる可能性が示唆されたことから、両尺度の全ての項目を使用した測定を行い詳細なデータを得る必要があるだろう。

また、満足度得点を独立変数、形成的授業評価票の４項目の得点を従属変数とした重回帰分析の説明率が有意であったことから、形成的授業評価票を使用することで地域スポーツ教室の児童生徒の満足度が測定可能であることが示された。しかし、説明率が50％に満たなかったこと、体育授業を対象とした先行研究と相関の傾向が異なることから、地域スポーツ教室独自の要因を検討し、新たな尺度を開発する必要がある。

⑵　対象者の客観性

本研究では、先行研究と異なり参加者の形成的授業評価票と指導にあたった大学生の体育授業観察チェックリスト得点との相関が少なく、負の相関も見られた。形成的授業評価と体育授業観察チェックリストの間には多くの相関関係が認められているが、観察経験によって左右されることが明らかとなっている（日野他［1996］）。本研究で対象とした地域スポーツ教室の指導者は、自分の活動を振り返る、地域スポーツ教室を組織的に観察評価する経験が乏しい大学生であったことから、相関関係が示されなかったと考えられる。指導者自身の評価に加えて、大学教員や専門的指導者が評価を行うこと、大学生が自身の活動を振り返るような取り組みを繰り返すことで、さらに客観的なデータが得られるだろう。

加えて、本研究では地域スポーツ教室の場面分析や雰囲気、指導者行動や相互作用行動といった教科教育法で行われている詳細な分析を行っていない。

大学生の指導者意識がどのような指導行動や相互作用行動につながるのか、地域スポーツ教室の内容や雰囲気が参加した児童生徒や保護者の満足度にどのように影響するかといった点について更なる検討が必要である。

⑶　今後の展望

本研究では、体育授業観察チェックリストを用いてアクティブラーニングの一環として行われた大学生の振り返りを行い、参加した児童・生徒の形成的授業評価および満足度、参加・帯同した保護者の満足度との相関係数を算出した。この結果から、大学生が児童生徒に心を込めて関わることは児童生徒の楽しさにつながるが、いままで出来なかった運動ができたという成果には結びつかないことが示されており、対象とした地域スポーツ教室の改善点が明示された。これまでアクティブラーニングや地域貢献として行われた地域スポーツ教室において大学生自身が自身の取り組みを振り返り、指導者意識を調査した研究はほとんど見られない。体育授業観察チェックリストの活用方法として、教員養成などの研修の場で使用し、データに基づいて話し合いを行うことで教師の質向上に役立つとの提言が出されている（日野他［1996］）。大学が学生に質の高いアクティブラーニングを提供するとともに、参加者が満足するような地域スポーツを提供するためには、スポーツ教室の実施後に指導者が指導内容を自ら振り返り、参加した児童生徒の評価と合わせて分析を行い、データを基に改善案を話し合うことで、地域スポーツ教室の指導者の質向上およびスポーツ教室の内容改善につながると考えられる。

一方で、部活動や教職課程に所属している大学生がボランティアとして指導・運営にあたっていることから、指導意識や動機づけの差が大きく、プログラム作成などの事前準備にあたる負担感を感じていることも否めない。スポーツを専門とする大学生がスポーツボランティア活動を実施する上で大学に望むこととして「単位として認定する」、「大学で行うことができる」、「情報提供を行う」ことが挙げられており（内藤［2007］）、指導にあたる大学生が高い動機づけを維持して準備にあたることができるよう運営者は検討していく必要があるだろう。

付　記

本研究は、平成29・30年度長崎国際大学国際観光学科共同研究費の研究助成を受けて行われた。

注

1）引用文献（炭谷［2016］）では、「アクティブ・ラーニング」と表記されている。

参考文献

朝日新聞 DIGITAL（2017）「単位目当てもあり？学生が戦力，東京五輪ボランティア」
https://www.asahi.com/articles/ASK6H7752K6HUTQP02V.html（平成31年１月２日閲覧）

中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための 大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm（平成30年12月３日閲覧）

長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子（1995）小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み，スポーツ教育学研究第14巻第２号，91-101.

長谷川誠（2010）大学の地域貢献に関する一考察―スポーツによる地域連携に注目して―，佛教大学教育学部紀要第９巻，211-222.

日野克博・高橋健夫・伊輿田賢・長谷川悦示・深見英一郎（1996）体育授業観察チェックリストの有効性に関する検討―特に子どもの形成的授業評価との相関分析を通して―，スポーツ教育学研究第16巻第２号，113-124.

池田孝博（2010）大学を拠点とした総合型スポーツクラブの運営に関する諸問題，福岡県立大学人間社会学部紀要第19巻第２号，１－８.

公益財団法人日本スポーツ協会（2018）「提言　今後の地域スポーツ体制の在り方について―ジュニアスポーツを中心として―」
https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/about/pdf/20180606_Regarding_the_future_of_the_regional_sports_system.pdf（平成31年１月８日閲覧）

小山宏之（2016）東京教育大学地域スポーツクラブ（KYO２クラブ）の活動による学生の学び，小規模大学が地域で活きるアクティブ・ラーニング，公益財団法人大学コンソーシアム京都，207-210.

國本明徳・正見こずえ・松本耕二・北村尚浩（2012）大学を拠点とする総合型地域スポーツクラブの会員に関する一考察：いきいき大東スポーツクラブのケーススタディ．大阪産業大学人間環境論集，11，37-52.

文部科学省（2001）「総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm（平成30年12月３日閲覧）
文部科学省（2012）「スポーツ基本計画の策定について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1318914.htm（平成30年12月３日閲覧）
文部科学省（2013）「スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業（大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化促進事業）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/attach/1335041.htm（平成30年12月３日閲覧）
元嶋菜美香・宮良俊行・熊谷賢哉・田井健太郎（2018）地域スポーツ教室の継続に関わる要因の検討―参加した親子の気分状態および継続意志に着目して―，体育・スポーツ教育研究第18巻第１号，5-13.
永井洋一（2013）少年スポーツ―ダメな大人が子どもをつぶす―．朝日新書：東京
内藤正和（2007）大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究，愛知学院大学心身科学部紀要第３号，21-29.
中島寿宏（2017）中学校体育授業における熟練教師と教育実習生の授業者としての違い―生徒の言語的コミュニケーション量と教師による生徒へのかかわりに着目して―，北海道体育学研究第52巻，29-37.
鬼澤陽子・安原志帆・内藤年伸（2017）小学校の体育授業の充実を目指した基礎的研究―群馬県における低学年の体育授業の実態調査を通して―，群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編第52巻，71-86.
総務省（2013）「「域学連携」地域づくり活動」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html（平成30年12月３日閲覧）
四天王寺大学（2018）「和のこころを世界に！TOKYO2020大会ボランティア参加学生に 宿泊費・往復交通費・単位認定サポートを決定！」
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/press/press-25389.html（平成30年12月３日閲覧）
炭谷将史（2016）地域社会とともに学び・育つアクティブ・ラーニング構築のプロセス，小規模大学が地域で活きるアクティブ・ラーニング，公益財団法人 大学コンソーシアム京都，214-216.
スポーツ庁（2017）「スポーツ基本計画」
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm（平成30年12月３日閲覧）
スポーツ庁（2016）「平成27年度総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果概要」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/（平成31年１月８日閲覧）
スポーツ庁（2018）「平成30年大学スポーツの振興に関するアンケート調査結果概要」（大学）
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1404336.htm（平成30年12月３日閲覧）
高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司（1989）教師の相互作用行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について，体育学研究 第34巻第３号，191-200.
高橋健夫・長谷川悦示・日野克博・浦井孝夫（1996）体育授業観察チェックリスト作成の試み：観察者の評価観点の構造を手がかりに，体育学研究第41巻，181-191.
髙橋健夫（2000）子供が評価する体育授業過程の特徴：授業過程の学習行動及び指導行動と子どもによる授業評価との関係を中心にして，体育学研究第45巻第２号，147-162.
高橋健夫（2003）体育授業を観察評価する　授業改善のためのオーセンティック・アセスメント．明和出版：東京
谷口勇一・渕辰雄・永井太介・羽田野直樹・村江史年・村上智美（2007）“子どものスポーツ”に対する期待構造(1)　―小学生とその保護者への意識調査から―．生涯学習教育研究センター紀要第７号，23-37.
藤後悦子・三好真人・井梅由美子・大橋恵・川田裕次郎（2018）地域スポーツに関わる母親のネガティブな体験，心理学研究第89巻第３号，309-315.
豊田則成・金森雅夫（2006）スポーツボランティアを経験することの意味とは？びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 第４巻，9-18.
常浦光希・田原陽介・山本孔一（2016）スポーツボランティアにおける学習成果の仮説モデルの生成― Ｊリーグのボランティアを経験した大学生に着目して ―，環太平洋大学研究紀要第10巻，211-216.
和田尚（2008）楽しさの構造，日本スポーツ心理学会編　日本スポーツ心理学辞典．大修館書店：東京
山口泰雄（2006）地域を変えた総合型地域スポーツクラブ．大修館書店：東京
財団法人日本体育協会（2005）公認スポーツ指導者養成テキスト　共通科目Ⅲ．財団法人日本体育協会：東京
全国大学体育連合地域貢献推進ワーキンググループ（2012）「大学のスポーツによる地域貢献に関するアンケート報告書」
http://daitairen.or.jp/?page_id=1164（平成30年12月３日閲覧）